

【氏名】 穎川 智

【所属大学院】（助成決定時）九州大学大学院

【研究題目】

新出土資料から見た道家の思想構築の過程について

【研究の目的】

現在、日中両国の中国古代思想研究者に注目されている研究として、新出土資料から中国古代思想史を再構築することがある。地中より陸続として発見されている中国・戦国時代の諸子百家が書き記した文献は、日中がともに重んじてきた儒教や道家の思想体系やその学派が活動した編年などを大幅に改める可能性を持っている。これら日中が共有してきた文化遺産を改めて共に研究していくことで日中両国が文化交流を盛んにし、相互理解と友好関係を深めることが可能であり、東アジア文化圏という枠組みで交流が活発になると思われる。このような状況の中で、新出土資料より特に『老子』をはじめとする道家思想の研究を行い、その原初的な思想体系およびその思想構築の過程を研究し、日中双方による共同的研究の中で交流を深めていくことが、本研究の目的である。

【研究の内容・方法】

まず現在陸続として出土している中国古代思想の文献において特に注目されているものに郭店楚墓竹簡があるが、その中で道家の思想構築の過程に大きな影響を及ぼしている郭店楚簡『老子』の思想について、修士論文の内容を発展させる形で検討する。『老子』の思想は孔子を主とする儒家の思想とともに中国および日本において伝統的に重んじられてきており、そこに新たな『老子』のテキストが発見されたことで、日中双方に大きな衝撃を与え、研究する価値の高いものとして評価されている。修士論文において行った郭店楚簡『老子』の思想研究をもとに、その新たな『老子』の解釈が戦国時代の道家思想においてどのように位置づけられるかを検討し、また修士論文では触れることのできなかつた郭店楚簡『老子』の問題点についても研究を進める。

次に同じく郭店楚墓竹簡の道家思想に関するテキストで伝世文献には見られない『太一生水』についても研究を進める。このテキストも戦国時代、楚国で通行した文字を用いているため、まずはその文字の校訂を行い、次いで『太一生水』の思想体系および『老子』との関係について研究を進め、また戦国時代の道家思想全体における位置づけも考えたい。

最後に上海博物館蔵戦国楚竹書の道家思想についても研究を行う。道家思想としては『互先』および『彭祖』というテキストがあるが、これらの文献についても文字の校訂およびテキストの解釈を行い、新たな解釈を示した上で、戦国時代の道家思想における位置づけを行いたい。

以上3点の研究を進めた上で、新出土資料郭店楚簡『老子』・『太一生水』、上海博物館蔵

戦国楚竹書『互先』・『彭祖』の4文献から、道家思想の構築の過程を明らかにし、日中両国がともに重んじてきた諸子百家の思想を再検討することで、両国の共同研究と交流を深めていくことが、研究の計画である。

#### 【結論・考察】

本研究では、まず郭店楚簡『太一生水』の文字の校訂を行い、郭店『老子』二十五章との比較検討を行った。その結果、『太一生水』は郭店楚簡『老子』二十五章の解説書としてその難解な内容を具体的に説明し、様々な現象をも言い表すことができるようにしたテキストであるとした。また現在は上博楚簡『互先』について文字の校訂作業を終え、その思想内容の検討に入っているが、これも郭店楚簡『老子』および『太一生水』との類似性が各所に見られ、それらテキスト間の継承関係が明らかにできると考えている。現段階までの結論から言えることは、『老子』のテキストが成立した戦国時代においては、すでにその思想内容に類似した文献が書き著されており、さらにその高度な道家思想の内容を継承していく過程を見出すことができた。この研究の過程において、中国の博物館を調査し、その館長や学芸員との学術交流を行い、友好的発展的な探求を行うことができた。